

[思い出の舞台]

「パリの芝居の思い出 マリー・ベル」

田之倉 稔

「団菊じじい」という言葉がある。この場合菊五郎は「五代目」か「六代目」かわからなかったので手元の国語辞典をひいたらこの項目はなかった。そのかわり「団菊左」という項目があった。「九代目市川団十郎、五代目尾上菊五郎、初代市川左団次をさしている」とあった。では正確には「団菊」に「左」を加えて「じじい」というのだろうか。

それはどうでもいいが、かつての歌舞伎の名優を見たことを自慢して、見たことのないものを悔しがらせる言い方とおもうが、これは昔のことをしゃべって得意になっている老人を揶揄する否定的な意味に使われるが、三島由紀夫がこんな意味のことをなにかのエッセーに書いていたのを覚えている。「〈先代を見た〉というのは日本人特有の批評精神のあらわれである」と。批評の言語になじまない日常生活のなかでは「先代」というのは一種の規範となっている場合がある。「先代」という概念は西欧の演劇には当てはまらないが、それでも伝説となっている名優や演出で、規範化したものはあるようだ。まだ世を去って間もないヴィテーズ、パロー、ストレーレルなどはそうなる可能性を秘めている。お断りしておくが、この小文はその方向には進まない。それは資料の必要なかなり厄介な作業となるからである。「マリー・ベル」という固有名詞が発する思い出の芳香にひたるだけにしよう。残念ながら「団菊じじい」の批評性は発揮できない。

私が初めてパリの土を踏んだのは1964年11月の初旬だった。その夜か次の夜コメディ・フランセーズに出かけた。見た芝居は『地球は丸い』。俳優は覚えていない。作者はアルマン・サラクルー。もういまやフランスでも日本でも演じられる機会をあたえられない劇作家である。時代はルネサンス期のフィレンツェ。主人公はサヴォナローラだった。

いまとなつてはサヴォナローラの僧服姿しか思い出せない。その数週間後新聞にマリー・ベルの名前を見つけて、劇場へと足を向けた。

われわれの世代は映画を通してフランスを知った。高校時代、恵比寿に汚い映画館があった。「恵比寿本庄」といった。ここがよく「懐かしのフランス映画」を上映していた。一日五本立てというのもあった。ジ

ュリアン・デュヴィヴィエの『望郷』、『我らの仲間』、マルセル・カルネの『霧の波止場』、『愛人ジュリエット』などなど数多くの「古い名画」を見まくった。思いつくままにあげると、男優ではルイ・ジュヴェ、ミッシェル・シモン、ジェラルド・フィリップ、ジャン＝ルイ・バロー、ピエール・ブラッスール、フランソワ・ペリエなど、また女優ではアルレッティ、エドウィー・ジュ・フィエール、マリア・カザレス、マドレーヌ・ルノーなどを映像として知った。後年フランスへ行って、あこがれが粉碎されたこともある。

たとえば『望郷』である。アルジェのカスバはセットだったようだが、あれに憧れていた。ところがあの映画のカスバはアルジェリアがフランスだった時代の象徴だったのである。フランスでポンテコルヴォの監督になる『アルジェの戦い』を見たときあのカスバは実は反仏レジスタンスの拠点だったことを知り、不明を恥じた次第。カスバの下にある大通りは「アナトール・フランス」というが、フランス人はふざけてアルジェリア独立後は「アナトール・アルジェリア」に変えられてしまったなどという。わたしにとってはカスバはもう『望郷』のカスバではなくなった。なるほどこのような迷路だったからこそカスバがレジスタンスの拠点となることができたのかと納得した。アルジェリア最大のカスバのあるアルジェへ行ったのは70年代の中ごろだった。まだアルジェリア旅行が危険ではなかった。

その『望郷』に主演したジャン・ギャバンは愛好する俳優のひとりだった。「ギャバン好き」は当時じつに多かった。



彼は舞台俳優ではなかったから、アーティキュレーションはわかった。まさにコロキユアルなフランス語をしゃべる俳優だった。もちろんそれは後年フランスへ行ってから知ったことだった。スクリーンやシャンソンと現実の落差はぞくぞくと出てきた。イヴ・モンタンのフランス語などもそうだった。あのしゃべりにあこがれていたが、フランスへ行ってしばらくすると、彼のフランス語はベタつくような、すこしもきれいではないのがわかってきた。こういうことには日本にいるとなかなか気がつかない。聞いた話であるが、ゴダール映画に出てくる俳優のフランス語を聞き取れなかった先生が多かったそうだ。あの時代のフランス語の先生のヒアリング能力は今よりずっとおとっていたのかもしれない。いまやラジオ・テレビのフランス語講座に出演する日本人はネイティブなみのフランス語発音をするので、いかにフランスが近くなったかを思い知らされる。われわれが映画を通してフランスに憧れていた時代と隔世の感がある。

さてマリー・ベルであるが、『舞踏会の手帳』の、帽子をはずにかぶった、あまり表情のかわらない、どちらかという冷たい感じの女性だったのをよく覚えている。ヒロイン、マ



リー・ベルは手帳に書きつけてあった何人かの男を訪ねる。リュクサンブール公園で宵闇の詩を吟じるルイ・ジューヴェの顔と姿は記憶に焼き付いている。オペラ座広場から走る広い通りを進むと、ブルヴァール・ボヌ・ヌーヴェルに出る。サン・ドゥニ門のすこし手前左側に「ジムナーズ・マリー・ベル」劇場があった。フェリシアン・マルソーの『La bonne Soupe』という芝居に出演していた。ミッシェル・コルバン編の『演劇百科辞典』(Ed. Bordas)によると、こうある。「Marie-Jeanne Bellon が本名。1900-85。1921年コメディイ・フランセーズ、デビュー。その後アンリ・ベックの『大鴉』で認められ、1928年“sociétaire”となる」その後『フェードル』『絹の靴』などの演技で悲劇女優としての地位を確立したというから、映画スターとして知られるようになる前は、演劇界の大女優だったわけである。映画ではジャック・フェデ（「フェデール」とするひともいる）やアベル・ガンスの作品に出演をし、1937年デュヴィヴィエの『舞踏会の手帳』となる。『Britannicus』のアグリッピヌを演じた後、1953年コメディイ・フランセーズを退団。「ジムナーズ」劇場の芸術監督になったのは1958年で、86年までその地位にあった。私が見たのは新しい活動が始まった時期にあった。劇場は芸術監督としての才能よりスターとしての名声を利用したかったに違いない。コメディイ・フランセーズを離れた後は、「ブルヴァール」喜劇によく出演していたようである。『舞踏会の手帳』からはちょっと想像ができない。しかし1960年ピーター・ブルック演出の『Le Balcon』に出演しているから、ブルヴァール劇の大衆的な人気に安住していたわけでもない。そんな経歴を知らずただ「マリー・ベル」というだけで私は劇場の椅子にすわった。